



第2章

「気滞」治療の鉄則

●『氣滯』とは何か？

身体の機能が順調に行われないうき、「氣が体内で円滑に流通しない」「氣が停滞した状態である」というような考え方をし、これを「氣滯」と表現している。氣滯を程度により「氣滯」と「氣逆^{きぎやく}」に分けている。

食べた物が口から食道・胃・腸を経て肛門側へ送られる。これを“胃氣^{い き}”という。胃氣は降が順、即ち正常である。ゲップ・嘔吐など逆蠕動は氣逆、胃部膨満・痞塞感などは氣滯である。

情動や心因のストレスが原因で、不安、緊張、抑うつ、怒り、ヒステリーなど情緒反応があり、脇胸膨満感、肩背痛、脇痛などが起きる。これを“肝鬱^{かんうつ}氣滯^{きたい}”という。

情動ストレスから、自律神経、内分泌系の異常を起こして、婦人では月經不順、乳房腫痛が起きる。これを“肝氣鬱結^{かんきうつけつ}による衝任^{しやうにん}の変調”という。精神的ストレスが自律神経および内分泌に影響を及ぼすことで、生理が止まるのも同じである。胆道ジスキネジー、胃潰瘍、過敏性腸症候群を起こしてくる。

悪心、嘔吐、苦酸水を吐出する。心窩部の膨満などを起こして来ると、“肝氣横逆^{かんきおうぎやく}して脾胃を犯す”という。

息苦しい、呼吸困難の状態を指して“肺氣壅滯^{はいきようたい}”という。

吸氣が入らず咳がこみ上げるとき、“肺氣逆^{はいきぎやく}”という。

これらは「氣滯」の代表的な病態表現である。

氣滯による痛みを“氣痛”といい、その特徴は、脹痛(脹ったような痛み)で、時に軽く時に重い、痛みの場所が移動性で、精神的な因子が関係する。

●西洋医学的に診た「気滞」を主とする病態とは何か？

気滞は大きく「中腔臓器の機能異常」と「精神的な気の異常」の二つに分けられる。一つは消化器官や中腔臓器（気道・食道・胆嚢・胆道・膀胱・卵管・子宮）のような自律神経の支配を受ける臓器の平滑筋の運動異常、ジスキネジーである。もう一つは気鬱、七情、肝気鬱結などと表現される神経症や心身症などの精神的気の異常である。

中腔臓器は、臓器自身の異常のほかに自律神経の異常が関与してくる。また、患者の訴える自覚症状は複雑で、器質的变化や、機能異常だけでなく、不安、緊張、ヒステリーなど精神状態が大きく影響する。この心因が発病や疾病の経過に大きな影響を与えている。精神的ストレスによる情動が自律神経の中枢に影響を及ぼし、自律神経や内分泌系に異常を起こし、中腔臓器の機能異常を起こしてくるというように相互に関連している。

中腔臓器の機能異常（ジスキネジー） 機能失調（中腔臓器の攣縮を主とした機能異常）

- ①上部消化管機能異常（咽喉頭異常感症、胃食道逆流症、逆流性食道炎）
- ②過敏性腸症候群
- ③胆嚢・胆道機能異常（胆道ジスキネジー）
- ④下部尿路の機能異常（膀胱尿管逆流症）、排尿異常（過活動膀胱）
- ⑤子宮・卵管の機能異常（月経困難症）
- ⑥気管・気管支の痙攣（咳嗽・呼吸困難・喘鳴）

精神的気の異常 ストレスにより起きる疾患 （気鬱、七情、肝気鬱結、心気不定、気の上衝）

抑うつ・イライラ・焦燥・不安・怒り・恐れなどの感情や精神的な失調による神経症や心身症。

●理気薬と理気剤について

気虚(アトニー性疾患)の治療は、補気で機能を良くする。気滞に対しては行気、気逆には降気を用いるが、この行気と降気を併せて“理気”という。行気薬の陳皮・香附子・木香は、降気薬の枳殻・厚朴と併せて健胃、悪心、嘔吐、腹部膨満など胃腸の気滞に良く、肝鬱気滞には青皮・鬱金・川楝子を、膀胱の気滞には烏薬を用いる。降気薬の沈香・柿蒂・半夏・枳実は嘔吐、吃逆を下す。沈香・紫蘇子・半夏・檀香・大腹皮などの利水薬は呼吸困難の肺気逆に用いられる。このほか、下表に示すように漢方薬物の中で、向精神薬として用いられるものがある。

これらの理気薬を、その病態に応じて組んだ方剤が理気剤である。

理気薬＝気滞に用いる薬物	
中腔臓器のジスキネジー（過緊張・痙攣・逆蠕動）を調整する薬物	
行気薬（気滞を治す）	陳皮・木香・香附子・縮砂・藿香・烏薬・青皮
降気薬（気逆を治す）	枳実・枳殻・柿蒂・半夏・呉茱萸・蜀椒・沈香・檀香・大腹皮・厚朴・檳榔子・紫蘇子
向精神作用をもつ薬物	
イライラ、緊張、焦燥	柴胡・芍薬・鬱金・甘草
易怒、興奮、怒り	黄連・山梔子・釣藤鈎
不安、心悸亢進	桂枝・甘草・茯苓・竜骨・牡蛎
不安、抑うつ	紫蘇葉・厚朴・香附子・薄荷・藿香
ヒステリー、癲癇、痙攣	甘草・大棗・小麦
不眠、鎮静	黄連・山梔子・茯苓・釣藤鈎・酸棗仁・牡蛎

●気滞を主とする西洋医学的病態と理気薬・理気剤の適応

①上部消化管機能異常

①緊張亢進型

咽喉頭異常感症(咽中炙臍、梅核気)、心下部痞塞感、心下部膨満感などを訴えるもので、食道・胃の緊張亢進や痙攣による病態で、この痙攣を緩める作用のある厚朴の配合された半夏厚朴湯に加減して用いる。

②胃食道逆流症・逆流性食道炎

胃食道逆流症は幽門痙攣、幽門前庭部の過緊張と逆蠕動による。これに対しては枳実・枳殻などの配合された茯苓飲や大柴胡湯、四逆散などが逆蠕動を正常にし、胃の内容物を速やかに腸に送る。逆流性食道炎の炎症症状には消炎作用の黄連・山梔子の配合された黄連解毒湯を少量合方する。

②過敏性腸症候群

過敏性腸症候群は大腸を中心とした消化管の過緊張と痙攣である。便秘型・便秘下痢交替型・下痢型で腹痛を伴うものには中腔臓器の痙攣性疼痛を緩める作用の芍薬・甘草の配合された桂枝加芍薬湯・加味逍遙散が用いられる。桂枝加芍薬湯はやや冷え傾向で、不安神経症の者に適する。精神的緊張の強い不定愁訴の多いものには情動ストレスを緩める作用の柴胡・芍薬の配合された加味逍遙散が適する。無痛下痢型はヒステリー反応を抑える作用の甘草・大棗の配合された甘草瀉心湯を用いる。

③胆嚢・胆道機能異常

胆道の疾患は、炎症・結石・腫瘍など器質的疾患が多い。しかし、この自律神経支配下の器官は、精神的ストレスの影響を受けやすい。胆嚢・胆道のジスキネジーによる疼痛は、季肋下部・胸脇部の張った痛み、心下部痛があり、心下痞硬・嘔吐などを伴うこともある。

胆道の痙攣性疼痛と蠕動異常に枳実芍薬散を主とし、胸脇部の疼痛やストレス性のものに柴胡・芍薬を配合し四逆散を主に病態に加減して方剤を組む。発熱があれば柴胡・黄芩を配し、黄疸には茵陳蒿湯を配する。臨床で

8

中腔臓器(胃腸・胆道・尿管・子宮など)の機能をスムーズにするには、
「枳実・芍薬」の配合された処方
(大柴胡湯・四逆散)を中心に加減して用いよ。

枳実—芍薬 ……中腔臓器の運動機能をスムーズにする作用

枳実は腸管や平滑筋の蠕動を亢進させる。これに対して芍薬は蠕動の亢進を抑えて、平滑筋の痙攣を鎮めて胃痛・腹痛を治す。枳実と芍薬が組み合わさって中腔臓器(胃腸・胆道・尿管・子宮など)の運動のリズムを調節し、機能をスムーズにする。自律神経支配下の中腔臓器の運動異常(ジスキネジー)に用いて、これを治す。

● Group 方剤には何がある？

枳実芍薬散、四逆散、大柴胡湯、茯苓飲、排膿散及湯

枳実芍薬散	枳実—芍薬
四逆散	枳実—芍薬(柴胡・炙甘草)
大柴胡湯	枳実—芍薬(柴胡・黄芩・半夏・生姜・大棗・大黄)
排膿散及湯	枳実—芍薬(桔梗・甘草・生姜・大棗)

⑥胆嚢炎……大柴胡湯・梔子大黃湯・茵陳蒿湯・黄連解毒湯などを合方する。

⑦過敏性腸症候群……痙攣性便秘型には四逆散が適応する。下痢型でもしづり腹、裏急後重を伴う者には四逆散に木香を配合して用いる。冷えによる者には桂枝加芍薬湯、当帰建中湯などが、また痛みを伴わない下痢型には甘草瀉心湯を用いる。

⑧膀胱神経症・膀胱尿管逆流現象……頻尿、残尿感、淋瀝など膀胱の機能異常には烏薬を加える。

⑨痔核の痙攣性脱出

②神経症、心身症(向精神薬)……イライラ・緊張しやすい者に用いる。女性では精神的ストレスによる月経不順、乳房の腫脹などにも有効である。

加 法

①易怒、興奮には黄連解毒湯を合方する。

②抑うつには半夏厚朴湯合香蘇散を合方する。

③不安、心悸亢進には苓桂朮甘湯加香附子・牡蛎を合方する。

④頭が重く、足が軽く、ふらふら揺れるときは柴胡加竜骨牡蛎湯を合方する。

⑤不眠には抑肝散加陳皮半夏を合方する。

⑥ヒステリーの転換反応には、甘麦大棗湯や甘草瀉心湯を合方する。

— 大柴胡湯 —

(ダイサイコトウ)

組 成

柴胡・黄芩・半夏・枳実・芍薬・生姜・大棗・大黃

薬 能

柴胡・芍薬……情動中枢に働いてストレスから来るイライラ、緊張を治す(自律神経鎮静作用)。

枳実・芍薬・大黃……枳実が中腔臓器平滑筋の蠕動を亢進し、小腸の通過時間を短縮する。大黃は瀉下作用があり、芍薬は蠕動亢進や瀉下による腹痛を止める。

柴胡・黄芩・大黄……消炎解熱作用(咽・耳・食道・気道・胸部・心窩部の炎症に対して)。

半夏・生姜・大棗……健胃作用。半夏・生姜は嘔吐を止める作用がある。

解説

本方は『傷寒論』に「太陽病、過経十余日、反って二三日之を下し、後四五日、柴胡の証仍在る者は、先ず小柴胡湯を与う。嘔止まず、心下急、鬱々微煩の者は、未だ解せずとなすなり、大柴胡湯を与えて、之を下せば則ち癒ゆ」とある。本方は傷寒という熱病で、少陽病と陽明病の病態を併せもつときに使われる方剤である。条文のように、嘔のあるときは、**大黄・芒硝**の類で下すと、嘔吐は激しくなり、悪心が続いてムカムカして嘔吐が頻発する(嘔止まず、鬱々微煩)。心窩部を圧迫すると硬く痛み、嘔吐しそうになり(心下急)、同時に心窩部から腹部にかけて痙攣性の疼痛を訴える。このとき胃の緊張は亢進し、胃体部から幽門前庭部にかけて蠕動が亢進して過蠕動になり、幽門は閉塞して胃内容物が十二指腸へ出て行かない。このような状態には**枳実芍薬散**が適し、**枳実**で幽門を開き蠕動を調整し、**芍薬**で消化管の平滑筋の痙攣を鎮め腹痛を止める。更に**半夏・生姜**で悪心・嘔吐を止め、**柴胡・黄芩**で消炎解熱し、更に**大黄**で消炎と瀉下を行うのが**大柴胡湯**である。

以上のように、**大柴胡湯**は**柴胡・黄芩**に**枳実芍薬散**・**小半夏湯**を加え、更に**大黄**を配合した処方と考えられ、大切なのは**枳実**の配合である。本方は少陽病の**小柴胡湯**と陽明病の**小承気湯**(= **大黄・厚朴・枳実**)を合方したような処方である。**小柴胡湯**より、更に消化器(胃腸)の炎症症状が加わって、嘔吐が激しく、心窩部が膨満して、圧迫すると痛むものに用いる。

本方を**四逆散**と比較すると、**四逆散**には**黄芩**や**半夏**の配合がないので、消炎や鎮嘔・鎮咳の効果はない。ただし、**大柴胡湯**と同じく**芍薬・甘草・枳実**の配合があるので平滑筋の痙攣

応 用

による疼痛、運動異常のジスキネジーによく奏功する。

①**感染症**……感冒、インフルエンザ、気管支炎、肋膜炎、肺炎などで少陽病と陽明病を兼ねた時期に用いる。大黃は柴胡・黄芩と同じく消炎解熱作用があり、小柴胡湯の適する病態よりも炎症が強く高熱が診られるときに使用する。化膿性炎症には桔梗石膏、黄連解毒湯などを加法、合方して使用する。

②**消化器疾患**

①**急性胃炎・慢性胃炎**

②**胃・十二指腸潰瘍**……出血があれば、四物湯、黄連解毒湯、桂枝茯苓丸などを合方する。

③**逆流性食道炎・機能性ディスペプシア**……逆流性食道炎は胃・食道逆流症(幽門括約筋の攣縮・逆蠕動)と胃酸の逆流による食道粘膜の炎症であり、本方の枳実・芍薬で逆流を抑え、ストレスなどの心因に対しては柴胡・芍薬で対処する。逆流に対しては、更に半夏厚朴湯を、食道の炎症に対して黄連解毒湯を合方する。

④**過敏性腸症候群**……四逆散の適応病態で便秘傾向の者に用いる。

⑤**肝炎・胆嚢炎・胆道ジスキネジー・胆石症**……炎症に対しては黄連解毒湯を、黄疸には茵陳蒿湯を合方する。胆石症による疼痛には芍薬甘草湯や大建中湯を合方する。

⑥**便秘症**

③**肥満・新陳代謝疾患・動脈硬化症**……大黃は大腸性の下剤で、効果発現は服用後6～8時間を要する。枳実は消化管の蠕動を促進して食物を下方へ送るので、大黃による瀉下効果を急速にしたいときに配合すると1～2時間に短縮される。特に腸管麻痺があり、高熱・うわごとなどが診られるときは一刻を争うので、大黃・枳実を配合する(大承気湯)。このことは食物の通過を早くし、小腸での消化吸收を抑えるため、栄

養障害を起こすことになる。通導散や大承気湯も枳実・大黃の配合があるため、虚弱者には注意がいる。中年以後の肥満で、食欲亢進・便秘傾向・脂肪太りの者に以上の効果を利用する。食毒の排出を促進する防風通聖散や、胃酸の分泌を抑える作用の黄連解毒湯を合方して用いる。

④眼科・耳鼻咽喉科・歯科疾患……結膜炎・虹彩毛様体炎・角膜炎など眼科の炎症性疾患、中耳炎・鼻炎・副鼻腔炎・扁桃炎・咽頭炎・耳下腺炎など耳鼻咽喉科の炎症、歯科の炎症などに応用する。炎症の強いときは桔梗石膏や黄連解毒湯を配合する。

⑤神経症・心身症……柴胡・芍薬は、中枢に作用して精神的ストレスによる不安・緊張・イライラ・興奮を鎮静する作用があるため、神経症・心身症に使用する。枳実・芍薬は自律神経下の平滑筋の異常運動に奏功する。胃・十二指腸潰瘍、高血圧症、円形脱毛症、不眠症、精神的インポテンツ、筋緊張性肩こりに用いる。また脳動脈硬化症、脳血栓症などで感情の起伏の激しい者に用いる。

⑥気管支喘息の体質改善……体質改善の目的で半夏厚朴湯や通導散に合方して用いる。柴胡・芍薬に抗ストレス作用があり、緊張・イライラを鎮静し、柴胡・黄芩に抗炎症作用があり、気道の炎症を抑え、半夏に鎮咳去痰作用がある。枳実・芍薬が気道の平滑筋の痙攣を抑えて運動をスムーズにし、去痰作用を促す。

②ストレス性の胃痛・腹痛……『金匱要略』には「外台柴胡桂枝湯方、治心腹卒中痛者」とあるように、急性胃炎・胃潰瘍・胃酸過多症・肝炎・胆石症などに伴う腹痛に用いる。また、芍薬・甘草は平滑筋の痙攣による腹痛を緩解し、柴胡・黄芩は消炎解熱作用により、軽度の炎症を治し、柴胡・芍薬・大棗・甘草は精神的ストレスを緩解するので胃潰瘍・胆石発作・過敏性腸症候群などのストレス性腹痛に有効である。

③神経症、心身症……不眠、月経前症候群、癲癇の体質改善などに用いられる。

④膀胱尿管逆流現象

⑤体質改善……カゼを引きやすい人や、軽い風邪を繰り返し、腹痛を起こしたり自家中毒を起こしやすい子供の体質改善に用いる。なお、扁桃腺炎・咽喉炎などで高熱を出すときや腎炎・リウマチなどには柴胡清肝散合補中益気湯を、咳や痰が出る気管支炎を起こしやすい者や気管支喘息には小柴胡湯合半夏厚朴湯（柴朴湯）を体質改善として用いる。

山本巖語録

●四逆散

四逆散というものは、芍薬甘草湯と枳実芍薬散に柴胡が加わったものと考えています。芍薬甘草湯は横紋筋の痙攣なんかに也使いますが、特に自律神経支配下における中空臓器の平滑筋の痙攣を止める作用が非常に強い。胆石とか、尿路結石とか、消化管の痙攣性の疼痛を取るのに最もよく使われる基本的な処方です。芍薬甘草湯を

基本にしておいて、冷えたりすると桂枝を加えたり当帰を加えたりしていろいろな処方ができてくるわけです。

枳実は、消化管なんかに使いますと、蠕動運動は速くなり律動が正しくなって、下のほうへ送って行く。逆蠕動を起こさせない。下へ向いて速く送るんです。したがって、芍薬・甘草で痙攣を止めて、枳実で律動をよくする。枳実芍薬